教育者としての坪内逍遙にみる東アジアの知的伝統

増　田　周　子

Intelligent Tradition of the east Asia seen in the Education of Tsubouchi Shoyo

MASUDA Chikako

During the Meiji Restoration, the politicians, scholars, and intellectuals moved Japan forward under pressure from other countries. It is very meaningful to look into what they had studied and where. Many of the writers who lived in the Meiji or Taisho periods had the experience of going to private schools and han schools (schools of the feudal domains), and their ancestors were scholars of the Chinese classics or Juku presidents.

In addition, there were some scholars who ran their own Jukus or compiled textbooks. In the field of Japanese literature, the studies of the writers' works and the study of the writers have been conducted mainly based on biographical facts of them, and there have been almost no studies of education associated with their qualities. What was taught in Jukus or han schools, such as the study of the Chinese classics, Western studies, and English, varies according to regions or environments. I'd like to consider what scholars and intellectuals learned in Shoins (Juku) located in Japan, the neighbors of Chinese cultures, and how they changed it and passed it down. In this report, I delve into what the Juku where Shoyo Tsubouchi, who reached school age of elementary education when the new educational system had not yet been determined, studied was like, what he learned, and how he felt and studied the nature and vision of the elementary and secondary education of Shoyo.

キーワード：坪内逍遙、塾、芝居、中等教育、教科書編纂

はじめに

激動の近代日本を動かすにいたった政治家や文学者、知識人は、どういう所で、どんなことを学んだのであろうか。明治・大正期に生まれた作家達のほとんどが私塾や藩校に通った経験があり、また、先祖が漢学者であったり、塾頭であったりという経歴を持つ者が何人もいる。その上、自ら塾を経営したり、教科書を発行したりした文学者もいる。

しかし、これまで、日本文学の領域では、作品そのもののストーリーを重んじた作品研究や、どこで生まれ、どこで育ったかなどの伝記的事実を中心とした作家研究を行ってきて、作家の素質そのものにかかわる「教育」を考えようとした研究は殆どなされてこなかった。塾や藩校で教えてきたものは、漢

学や蘭学、英語など地域や育った環境に応じて様々であるが、儒教の影響も大きい。塾で何を学び、そして、近代日本の作家や知識人に何を継承していったのか、という観点から、日本の近代文学者達をとらえると新たに見えてくるものがありそうな気がする。日本という周縁の書院（塾）から、彼らがどんなことを学び、時代の先駆者としての役割を果たすことになったのかを本稿では探りたい。

本稿では、その中の一人坪内逍遙について、述べる。

一　坪内逍遙の生い立ちと塾

１．寺子屋入塾以前

「逍遙年譜」[1] によると、坪内逍遙は、1859年５月22日、美濃国加茂郡太田村（現岐阜県美濃加茂市）―当時尾張藩代官所所在地―で、父坪内平右衛門信之（維新後は平之進）、母ミチの三男で十子中の最末子として生まれた。幼名は勇蔵。４人は既に死亡し、６人だけが残っていた。父は代官所の次官をしていたが、明治維新の藩政改革に伴い、代官所が北地総官所と改称された1869年６月に、調役という職を辞して、尾州藩譜代席格十一石三人扶持を奉還し、尾張藩名古屋郊外上笹島村に移住した。このころのことを逍遙は次のように書いている。

> 私の姉三人はいづれも名古屋の士族の家へ縁附いてをり、一の兄は藩の用務で信州方面へ出張してをり、次ぎの兄は、如雲が特に編成した草薙隊の司令官として営所へ赴任してをつたので、家に残つた血族は五十八歳の父と四十九歳の母と十一歳の私とだけであつた。
>
> 此年齢関係によつても推察されるであらう如く、私は多勢の甥や姪の或者よりも年下で、孫同様の末ツ子で、従つて幾文がたか甘く育てられ（中略）丁度私の七つ八つといふ学齢頃から、太田駅が東西来往の一要衝となり、其附近一帯が何となくざはざはと落着きのわるい場所柄となつてしまつたので、学問はあがつたり、（中略）私はとうとう十一歳までは寺子屋へも遣られなかつた。[2]

一の兄に、叱られ叱られ『実語経』、『孝経』、『大学』と素読をし、習字も姉婿や兄の書いたもので間に合わせながら練習し、１日中ぬらぬらと遊び暮らし、次ぎの兄には鳥羽絵まがいの模造草双紙を書き継いでもらったりして遊び、無駄にすごしていたらしい。上笹島村で初めて、寺子屋へ入るのである。この時の様子を

> 幸ひに保存された父の其頃の「日記」に據ると ― 明治二年の七月廿日に、私を名古屋巾下新道町の柳沢といふ手習師匠の許へ入門させることにして、自身で私を連れて行つた。其束修が金五十

1）「逍遙年譜」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日、第一書房、３～44頁）

2）坪内逍遙「私の寺子屋時代」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日、第一書房、７～８頁）

疋だと明記してある。[3)]

これが、正式に教育を受けることになった最初であった。

2．寺子屋時代

勇蔵が入門した柳沢という寺子屋の作りはどんなものであったか、師匠はどんな人で、どういう毎日であったのであろうか。前出の、坪内逍遙「私の寺子屋時代」には次のように記されている。

> 柳沢の家の表がかりは、京都式で、一体の格子造り、一方に方寄せた格子戸をくゞると、そこからずっと背戸まで行抜けの土間。右手は壁、左手は二間四枚の舞良戸に、狭い一尺幅ぐらゐの上り段。舞良戸を開けて上ると、そこと其次ぎの間が教場で、たしか八畳二間のぶッ通し、其奥に更に二間あつて、其かたかたが前に言つた師匠の居間、かたかたが台所であつたかと思ふ。尚ほ中坪を隔てゝ、縁側つゞきに、奥に、家族の住む処があつたのだが、一度も入つたことが無かつたから、よくは思ひ出せない。寺子は三十人内外。十二三が年長で、七つ八つが最年少であつた。一畳に少くとも二人づつ、例の天神机を控へて列を作り、まづ二列が向ひ合つて一の平行線を形造ると、次ぎに第二のそれが隣列の一線と背中合せに坐つて、同じく平行線を画くといふ按排に、めいめいの毎日の坐り場所が定めてあつた。さうして放課後は、毎日当番が二人づつ残つて、跡の掃除をすることになつてゐた。狭い処に目白押しをして而も対ひ合つて、互ひにべとべとの草紙をはぐつては書くのだから、善悪共に少し意地ッ張がゐれば、すぐに睚み合ひが始まる筈だが、準天才の卵らしいのは勿論、半秀才のお身代りになりさうなのも、涎繰りの正統らしいのさへもゐない平凡を極めた少年団であつたゞけに、至極平穏無事。尻と尻とが衝突する後列同志の時たまの境論も、大抵は、雌雄の不判明な、甘ッたるい名古屋訛りの談判が二三分間交換されるぐらゐで、泣寝入になるのが定りであつた。[4)]
>
> 先代は大分評判のよかつた師匠であつたとかだつたが、当主は、其頃三十四五の、背の低い、其割に頭の大きい、けれども、頤の方で急に小さく細つた顔の、どういふ威厳もない風采の男であつた。四インチ強のチョン髷は歴々と目に残つてゐるが、月代は細く剃りあげられてゐたやら、総髪であつたやら、おぼえてゐない。彼れは、行灯袴を穿いて、日がな一日、たかゞ三四坪の中坪を左手に見た六畳か八畳の一間の床を後ろに、本箱を左右に、又後ろに、机と見台とを前に控へて、引ッ切りなく手本を書く、其読みを教へる、清書を直す、漢学を教へる。それが其日課であつた。漢学といつても、『孝経』に四書、五経の一部、多分『十八史略』、『日本外史』なぞが関の山であつたらう。が、後の二つを習つてゐる者は見たことがなかつた。私は行書や楷書を習ふのと四書の復

3）同、9頁

4）同、12～13頁

習と五経の素読とを目的に入門したのであつた。[5)]

こんな状態の寺子屋であったから、約三年間通ったにもかかわらず、一度も「線香と茶碗とを持つて机の上に立つて鼻汁を垂らしたこともなければ、立たされて垂らしてゐるのを見たこともなかつた」と述べている。

ちなみに師匠への謝礼は「師匠筋への支払は、其頃は盆、暮の二回であつたらしく、亡父の『日記』によると、柳沢へは、いつも金弐百疋、茶、花の師匠へも同断、華堂へは金百疋となつてゐる。其外に、正月十八日の稽古はじめ、九月の月初めのそれなぞに、銀二朱と二もんめ位ゐの菓子折持参云々といつたやうなことが誌してある。そんな相場であつたものと見える」[6)] とある。

逍遙が学齢期を迎えた明治初年頃は、寺子屋組織は弛廃し、新政府も学制（1872年８月）を定めるに至らなかった時代で、

> せめて明治十年後程度の小学教育でも授けて貰つてゐたら、もう少し早く人間並みの智慧が暢びたであらうに、十二分の厭気と慄え気とを以て、屠所の羊の如く見台の前へ引出され、「穆々タル文王、於緝熈ニシテ敬止ス」だの「節タル彼ノ南山、維レ石巌々」だのと審判官声で宣告されるのだから、初めから耳ががんがんして、心そこに在らざれば見れども記えられず、聴けどもすぐ忘れッちまふ。記えないと、審判官は手に持つてゐる尺何寸もある竹の字突きで、見台の端をびしりッ！其たびに小羊の左右の腕は覚えず肩ぐるみびくッとする。さ！「其奥ニ媚ビンヨリハ寧ロ竈ニ媚ビヨトハ何ノ謂ゾヤ。子曰ク然ラズシテ罪ヲ天ニ獲レバ祷ル所ナキナリ。」さ、もう一度！何度繰返して読まされたからッて、── とうに問答は済んでゐるのらしいけれど、── それが何の謂ひだか、到底呑込めよう筈が無かつた。[7)]

と国語の教授法を疑問視している。

> 習字とても同理であつた。「世界は広し、万国は」と和讃式、阿房駄羅式に面白をかしく手本を仕立てることは福沢翁の卓見以後のことなのだから、其以前は、「名頭」、「国尽し」、「商売往来」、「用文章」いづれも旧式の乾燥無味。「千字文」に至つては、半分以上は陳奮漢でもあり、無用でもあつた。
>
> 算術とても同理であつた。二一天作の五が、習ふ者に取つては、全く没分曉的であり、没利害的であつたが如く、二進が一進しようと、三進しようと、それがどういふ役に立つのだとも解らなか

5）同、11～12頁
6）同、28頁
7）同、10頁

つた。[8)]

このように、明治初年の初等教育は、不備を極めた旧寺子屋で、行われたのであった。逍遙の通った柳沢という寺子屋は、当時の寺子屋の一標本とも見られるようなものであった。

> 尾張が藩でなくなつて、名古屋県が新学令によつて、先づ旧藩の明倫堂といふ皇漢学本位、撃剣本位の中等教育機関を廃して、寺院や旧学館等を仮に小学校に充てゝ、新時代の教育に着手したのは、明治四年七月以後のことであつたからである。[9)]

そんな寺子屋であったが、勇蔵は友達と「へのへのもへい」式のいたずら書きや墨の砕片の引っかけっこをして遊んだりしたが[10)]、その中で一番の仲良しはヨウ様（勇蔵が名前を忘れたので仮に付けた）という子だった。勇蔵はお茶やお花の師匠にもつかされ、特に1870年４月、木田華堂という四条派の画家へ入門させられて以来、ヨウ様に殊に親しさを増した。

> といふのは、此少年の兄は、其頃十四歳ぐらゐであつたらうが、号を杏斎（?）といつて、もう中々画けて、師匠華堂にも末を楽まれてゐたといふ関係上、私は、兄とも同門といふ別の縁故が加はつたからであつた。[11)]

勿論、逍遙はこのいずれもものにならない、ぬらくらであったというが、わずか11、２歳の少年が寺子屋の情景その他をこれほど詳細に記憶していることなど、並みの子供ではなかったといえる。

ここで勇蔵の家族についてもう少し詳しく見てみよう。

二　坪内逍遙をめぐる家族と友人

先に述べたように、坪内逍遙の父は小牧で生まれた地方人であり、毎日きちんと日記をつける几帳面な潔癖家で、無愛想な男であった。家庭教育に関しては、漢学の復習を怠るとたまに叱ったが、あまりかれこれ口出しをすることもなかった。大層な神様崇拝、皇室崇拝者であり、神道論は平田篤胤、衛生面は貝原益軒が父の信仰であった。それに比して母は名古屋生まれで、親は風雅と闊達とで産を傾けたといわれる商人であり俳人である。親戚にも多少文芸に携わっている者もあったせいか、生来の芸事好きで、芸術的嗜みもあった。

8）同、10～11頁
9）同、11頁
10）同、16頁
11）同、16頁

私が比較的早くから草双紙に泥んだのは、母が太田の田舎にゐてさへ、始終のやうに何等の新旧小説類を取寄せてゐたからであつた。観劇は母の最上の娯楽であつたらしい。[12)]

しかし、父が劇に対して無趣味であった事や当時の猥雑な脚色や演技を嫌っていたので、なかなか観劇はできにくかった。明治三年になると、絶えて久しかった中村座が再興され、東西の名優たちが次々に名古屋へ来て技を競うようになった。名古屋に縁附いていた芝居好きの姉の一人が、母と腰巾着の勇蔵を誘うことで父の承諾を取り、月に１、２回、年々その回数を増しながら、明治六年までこの観劇は続いたのであった。

そのための準備として意図的ではなかったが、“大惣”という貸本屋でいつも本を借りて読んでおり、次のように記している。

番附で上演される劇の外題を見ても、其作は本来だれが書いたのかなぞと考へて見たこともなかつた。けれども筋立を知つてゐて劇を観るのと全く解らないでゐて観るのとでは、そこに大きな差のあることは、一二回の経験がすぐに教へた。さうして観劇に先きだつて、その劇に因む写本の台帳、刊本の根本、もしくは草双紙、稗史等を借り出すために、特に私を大惣へ走らすのが母の用意でもあつた。

斯ういふ準備知識があつたので、私は、何事にも晩手であり、低能でもあつたのだが、劇に対してだけは、年齢よりはだいぶませてゐたといへるであらう。[13)]

そして、自宅へ連れてきた寺小屋の友達と盛んに芝居ごっこをして楽しんだ。この様子は次のように述べられている。

其少年は萎びたやうな細面で、妙にしなをする癖があつて、髷を白元結で幾箇所も堅く縛つて、名古屋では普通見なれない若衆髷風に取上げてゐた。おまけに、声の調子も、色白なのも、どことなく女のやうだといふので、それが一座の女形。私が主座俳優を兼ねた舞台監督、劇をまだ會て観たこともない此一座をひきゐて、宅の角長屋を舞台兼見物席、自分らを役者兼見物にして、たわいもない芝居ごつこ。其以前に菓子折や板目紙で、草双紙の画なぞを見真似に私が不細工に拵へた切出し式の小道具で、最近に観た或劇の或場面なぞに似た好い加減の即興劇。筋は「口立て」で、白はめいめいの出鱈目。つまり、立廻りが主であつたが、それとても出たとこ勝負。渡海屋銀平であつたか、漁師浪六であつたか、浪七であつたか、櫂と煙草盆と煙管と薙刀を、大分念入りに私が拵へたのを思ひ出す。[14)]

12）坪内逍遙「お袋の腰巾着」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日、第一書房、73頁）

13）同、76頁

14）坪内逍遙「私の寺子屋時代」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日、第一書房、26～27頁）

ついで、一の兄、幼名金次郎の鉄馬は、女が三人続いた後にやっとできた長男で、武芸、学問とも父祖以上に修得し、十五歳で代官所に出仕し、とんとん拍子に出世した父母自慢の息子であった。前述したように、勇蔵には尺何寸の字突きで見台をぴしりッ、の兄であったし、小謡のてほどきから「橋弁慶」や「猩々」を何度も叱りつけ、泣かされながら教えられたのもこの兄で、怖い人だった。

それに引きかえ、次ぎの兄清之丞は俊才で、「武芸、学問、目鼻立、何もかも一の兄よりも上で、画も書も一寸書き、詩才も、文才も、其他の芸事にも質がよく、器用で、辛抱づよく、此兄にこそうんと習はせたら、きっと物に成りさうであつた」[15] というほどの人で、勇蔵は大好きであった。

> 私が此兄を好いたのは、主として遊び相手になつてくれたからであつたのだが、第二には、其趣味性に相投合する点が多くて（中略）親しみが深かつたからである。それに、此兄は殆ど私を叱るといふことが無かつた。[16]

しかし、明治四年、長兄鉄馬が四年ぶりに帰省すると、勇蔵の将来の教育方針を父と話し合い、柳沢が書いた行書の手本を見て、「こんな書を習つてゐた日にゃ師匠以上になつたところで役には立たない。」[17] と勧告し、外国語を学ばせることの必要、一日も早く東京へ出す必要を説いた。

> 此勧告が原因で、翌年（十四歳）の春、私は其頃比較的に評判のよかつた書家で、やはり宅から余り遠距離でもない処に住んでゐた青山某の門に入ることゝなり、同時に柳沢を退つてしまひ、漢学は、丁度次ぎの兄が職を辞して帰宅したので、一しょに、増田某の許に通つて、今度は素読ばかりでなく、『十八史略』であつたか、『日本外史』であつたのかの講義をも聴くことになつた。[18]

三　坪内逍遙の学生生活とその後

かくて勇蔵の三年におよぶ寺子屋での学習は終わったのである。1872年（14歳）２月からは、次兄清之丞と共に私立白水学校で、増田某に漢籍を学ぶことになり、８月には 次兄と共に英語を学ぶため、愛知洋学校に通うことになった。翌1873年12月、県立英語学校成美学校へ入り、本格的に学校生活が始まるのである。しかし、この学校も1874年（明治７年）廃せられ、官立愛知英語学校が創立され、そこへ入学する。1876年８月、県の選抜生になって、開成学校の受験に上京、入学すると寄宿舎生活をする。各県から選抜された給費生の雑然とした集まりであったが、勇蔵改メ雄蔵はすこぶる平凡な学生だった、という。翌年、開成学校は東京大学、東京英語学校は東京大学予備門と改称される。1878年10月、長兄鉄馬改メ信益の妻が亡くなると、長兄が遺伝の中風を患い半身不随の状態になったので、その看護

15）同、31頁
16）同、32頁
17）同、39頁
18）同、39頁

のため、長兄の家に寄宿し、1879年東京大学文学部本科（政治経済科）に入学する。1881年（明治14年）23歳で本郷元町の私立進文学社で英語を教え始める。

1882年（24歳）7月、落第し、以後大学への通学の傍ら下宿にて初学者に英語を教え、同時に進文学社（社主橘旗郎）でも、生計を立てるため英語を教え続ける。

1883年（25歳）１月、本郷元町に借宅して年少学生７・８名を預かり、その通学の監督をすると同時に、閑暇に掛川銀行頭取永富謙八、其他の依嘱により、英語を教える。もちろん進文学社との関係もいままで通りであった。この頃「該撤奇談」を訳了する。５月、小石川初音町に移る。どこへ移った時も常に預りの生徒たちは連れて行った。７月政治学科を卒業して文学士の称号を受ける。９月、友人高田の奨誘によって、私立東京専門学校の講師となり、主として外国歴史、憲法論の訳解等を担当した。

1884年（26歳）６月、年少学生らの監督に便利なように永富謙八が出資して、本郷真砂町十八番地に雄蔵のための一新屋を建築した。この時より預り学生の数増加して十余人となる。

1885年（27歳）２月、「小説神髄」の旧稿を修訂整理する。４月、「書生気質」起稿。11月より小石川同人社で英語を教えるようになった。『英文小学読本』脱稿する[19)]。

この年、１月本郷区真砂町十八番地にあった坪内逍遙の家塾に当時十歳の長谷川如是閑（幼名・万次郎）が、兄（松之助）とともに入塾を許され、「山崎覚次郎・永富雄吉・丘浅次郎・木村政吉ら年長の学生たちと共同生活をしながら、本郷小学校に通う」ことになった[20)]。

また、長谷川如是閑はその、真砂町の家塾のことを次のように語る。

> 私が逍遙先生の本郷真砂町十六番地の家塾に御世話になつたのは、十歳ばかりの頃であつた。先生は歳こそまだ三十に充たなかつたが、既に文壇に一家を為して居られて、私は小学校の生徒だつたのだから、先生のその頃の述作を読み得る年齢にも達してゐなかつたので、ただ先生を、子供が親に対するやうに仰いでゐただけであつた。けれども子供の私が先生から受けた感じは、専門の事柄以上あるものとして、無自覚時代の私の心の底に根を張つて、今日までの私の生涯に影響してゐたやうに思はれる。[21)]

という。続けてより詳しく

> 矢崎鎮四郎氏即ち嵯峨の屋御室氏で、私が兄と共に先生の塾に入つた翌年に、同氏もそこに来られたのであつた。その頃の先生の真砂町の塾は、後に日本郵船の重役となつた故永富謙吉氏の厳父が、先生に謙吉氏の教育を托されるために建てた家で、母屋続きに下宿屋のやうな部屋が並んでゐた。私がそこに入つた時は、塾生は永富謙吉氏の外に、今の山崎覚次郎博士、丘浅次郎博士、鈴木虎十郎、加古貞太郎、飯田万吉、木村政吉の諸氏と、先生の姪の落合篤氏の七人で、私が出る頃に

19)「逍遙年譜」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日、第一書房、３～44頁）

20）山領健二編 「長谷川如是閑年譜」（『長谷川如是閑集』第１巻、1989年10月20日、岩波書店、325頁）

21）長谷川如是閑「逍遙先生のある一面」（『長谷川如是閑集』第１巻、1989年10月20日、岩波書店、123頁）

更らに二人ほど加つた。矢崎氏は長谷川二葉亭氏の紹介で来られたのだが、旧外国語学校の露語科出身としては二葉亭氏よりは先輩で、その頃既に何かの官吏を罷めて小説家として立つべく先生の門に入つたのであつた。

鈴木虎十郎といふ人は（中略）海軍兵学校に入つて、日清戦役に少尉で出征して、開戦早々の威海衛の攻撃で戦死したが、もし生存してゐたら相当の所まで行つた人と思はれる。山崎覚次郎氏は予備門の学生で、体格は小さかつたが、中々腕力家で相撲も強かつた。山崎氏が或る日永富氏と食堂で口論をやつてつひに組打ちとなつたが、大きい永富氏を小さい山崎氏が押へつけた所に、物音を聞きつけて先生が入つて来られたのを知らずに、山崎氏は永富氏の顎を抑へて頭を畳に押しつけてギユウギユウ云はせてゐるのを、先生が苦がい顔で黙つて見て居られた光景は、今も私の目にありありと残つてゐる。（中略）私が先生の所に御世話になつたのは、先生の『慨世士伝』や『書生気質』その他を出版した晩青堂といふ書店の主人が父の友人だつた関係で、先生は大学生の頃元町の家で年少の学生を七八名預つて居られたが真砂町時代には最早子供は預らぬことになつたのを、私達兄弟二人だけ特別に許されたのであつた。[22)]

1886年（28歳）１月、進文学社、専門学校での仕事も今までと変わらずに続けながら、この春頃より一週三回駿河台成立学舎男女両部をも教えることになり、同人社を辞した。
このように大学卒業と同時に、東京専門学校や他の学校で、英語、西洋史、憲法論の訳解、などを教え、家では私塾を開き、預かり学生を、大学その他の高等学校に入る者が多くなりはじめる頃まで、あしかけ五年も面倒をみるなど、大いに教育に力を尽くしながら、『読売新聞』、『中央学術雑誌』、『政学講義録』、『難波新聞』などに寄稿した。

1887年頃、あまりの多忙のせいか、宿痾の胃腸病や神経衰弱気味で、執筆途中で中絶することなどもあったが、東京専門学校の教育だけは続けていた。1890年には自宅で親しい学生らにシェークスピヤの講義もはじめ、翌1891年『早稲田文学』を創刊する。研究や創作の発表の場として提供したいという意図であった。1892年より「美術論考」を『早稲田文学』に連載する。東京専門学校の余興に学生に戸外劇をさせたり、一部の学生との朗読会を催したり、さらにシェークスピヤの特別講義も自宅で開催するなど、教育者としての使命を生き生きと果たしている。この頃のことを次のように述べている。

私は、東京大学の学生であつた頃から、私立の或英語学校で英語の訳読を教へてをり、明治十六年に大学を卒業すると、直ちに早稲田の私立東京専門学校の講師になり、西洋歴史や英国憲法論や憲法史を或ひは訳述し、或ひは原書によつて講義する傍ら、英文の解釈を担当し、（中略）或期間は一週四十余時間を費した。初めて英文学の講座を専任したのは、明治廿三年に文学部を専門学校に設けてからであり、掛持ちを段々に止めたのも其頃からである。

さういふわけで、私に取つては、教師が本職で、著述は初めから全くの余業であつた。

廿四年に『早稲田文学』を発刊したのは、一は之によつて新設の文学部を幇助しよう為であつた

22）同、124～125頁

が、一は之を研究、創作の機関にして、自己の修養に資さうとしたのであつた。[23)]

四　坪内逍遙と中等教育

1896年には中等教育の必要性にかんがみ、早稲田中学が創立され、雄蔵は教頭を兼任することになり、自身の仕事は一頓挫した。

> 中学教頭としての第一当面の責務は徳育即ち実際的倫理の教訓と誨導とに在らねばならぬと考へもし信じもしてゐた自分は、平の教員としての閲歴が相応に有つたにも拘らず、さういふ方面には、何等の経験も造詣もなかつたから、一時は大きに困んだ。
> （中略）東西内外の倫理標準が怖ろしく動揺し始めて、論議が洶湧し沸騰した明治の中期に、何等かの新倫理観に立脚して修身処世訓を説かねばならぬといふのだから苦しかつた。[24)]

それでいろいろ本を読んではみるが、何とか自分には理解できても、人には説明できにくかったり、と困難を極めた。そこで「一瞥下に全関係を看取されるやうに図表に製し、さうして更に精査し細検して、一には自分の記憶に資し、二には他人に説明する時の便宜とした。それは、所謂鳥眼図（俯瞰地図）から思い附いた」[25)] という。

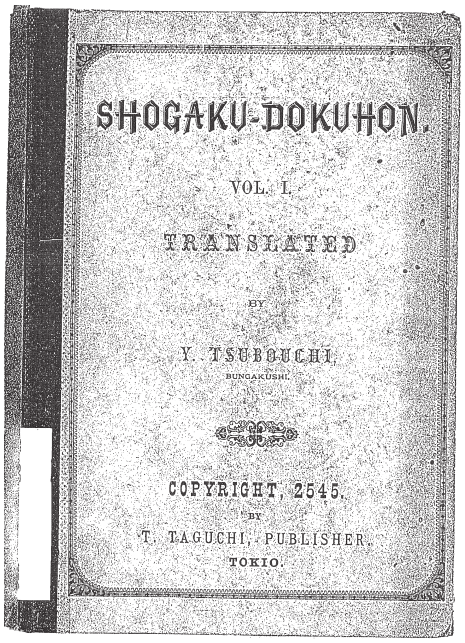
> 他人に取つては、さほど役に立たんものかも知れんが、目の直覚力を幼年時代から最も多く頼み馴れてゐた私に取つては、是れが存外に用を成した。で、本巻に載せたもの以外、倫理、心理に関するもの以外に、病理学、犯罪学、哲学、宗教、其他に数十種の図表を拵へ、それによって、ともかくも自分の足場だけは築き上げ、辛うじて前後七年九ヶ月間の教頭兼校長の職責を果すことを得た。[26)]

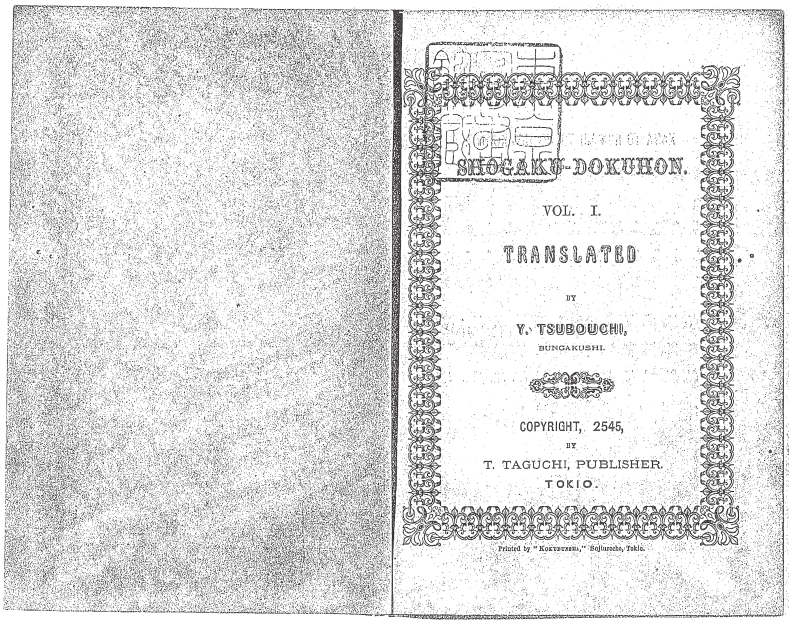
と述べ、どんなことに関しても創意工夫していく姿勢が見える。そして1885年の『英文小学読本』についで、多くの中等学校の教科書を編纂している。『英文小学読本』の発刊の経緯については、長谷川如是閑が、「丘浅次郎氏も予備門の学生だつたが、学費を得るために進文学社といふ中学の英語の教師をしてゐた。毎日のやうに昆虫の採集に歩いて、日にやけて真黒だつたので『黒い先生』と呼ばれてゐた。その頃出た坪内先生の『英文小学読本』といふ本は、先生の編纂されたのを丘氏が英訳して、先生が訂正されたのであつた」[27)] と記しているので、英訳の下訳を丘浅次郎がしたようだ。

次にその他の、教科書や字引など主なものをあげてみる。

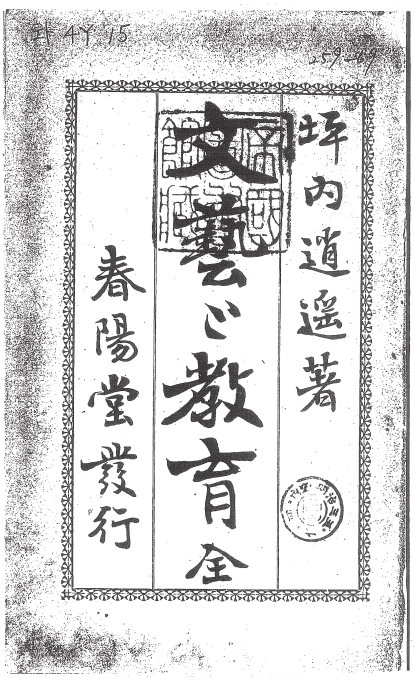
23）坪内逍遙「緒言」（『逍遙選集』第６巻、1977年７月22日、第一書房、１頁）
24）同　２～３頁
25）同　３～４頁
26）同　４頁
27）長谷川如是閑「逍遙先生のある一面」（前出、125頁）

①

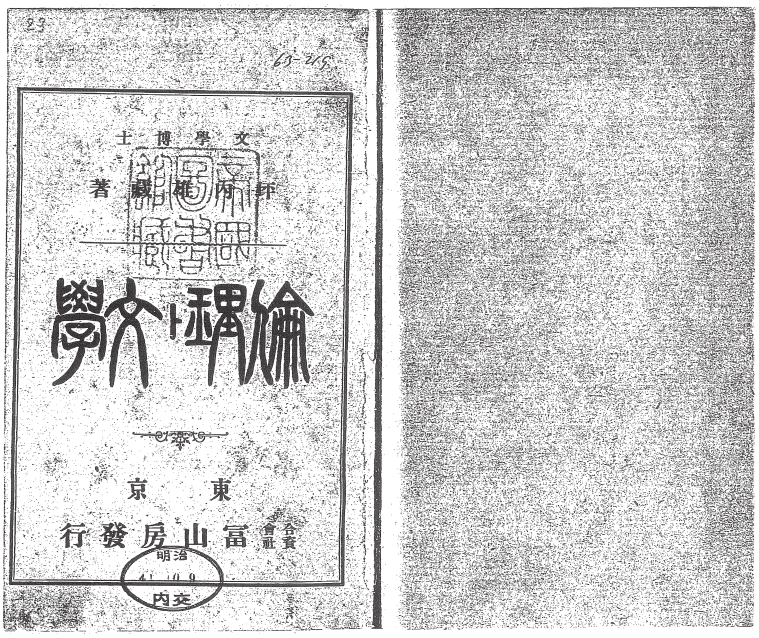




②

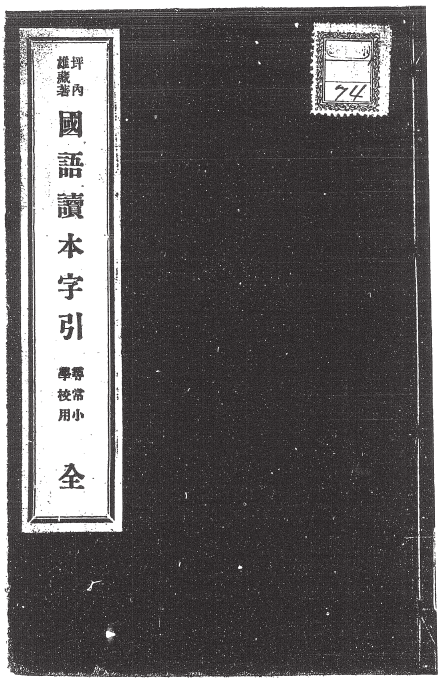


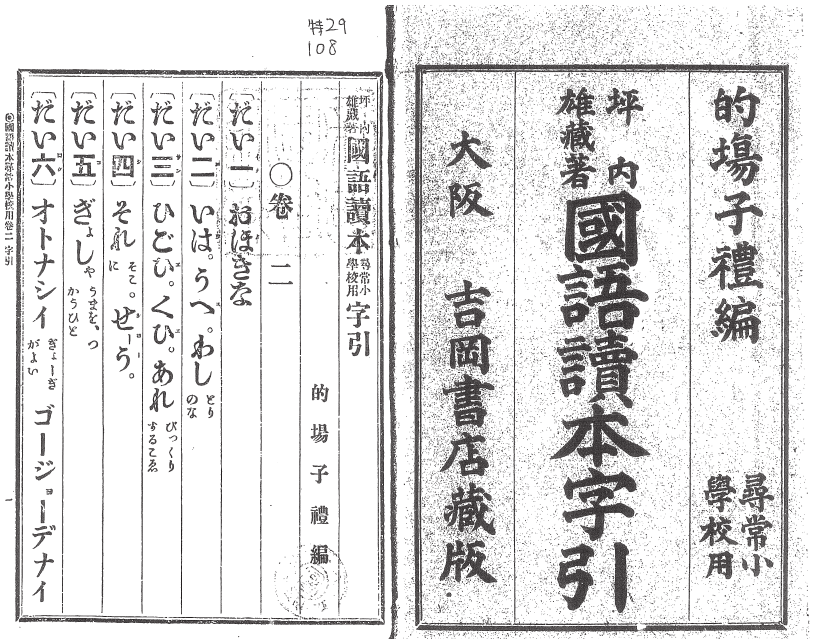
③



画像①～④は国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」による。

④





『国語読本』（明治33年９月　富山房）男子用16冊、女子用16冊
『尋常、高等小学読本』（前者を大いに訂正したもの　帝国書籍株式会社　不刊行）
『文藝と教育』（明治35年６月　春陽堂）
『中学修身訓』（明治39年11月　三省堂）５冊
『中学新読本』（明治42年10月　明治図書株式会社）10冊
『倫理と文学』（明治41年10月　富山房）
『新撰国語読本』（明治44年12月　富山房）10冊
『教化と演劇』（大正４年１月 尚文館書店）

他に『国語読本字引』坪内雄蔵国語読本字引　尋常小学校用、高等小学校用　１－４（明治34年８月吉岡書店版）などもある。

私が小、中学の教科書をいろいろ編纂したのは、書肆の懇嘱に余儀なくされたのではあるが、一は中学教育に従事してゐた経験上、教課書から換へてかゝる必要を認めたからであつた。いつそ小学校を私立して其校長にならうかとさへ、ほんの或一週間ほどの感じではあつたが、思つたこともあつた。[28)]

28）坪内逍遙「緒言」（前出、５頁）

小、中学校教育の重要性を痛感していることがよくわかる。また自らの10歳頃を振り返って、

> 閑さへあればたわいもない、くだらん本ばかり読み耽つてゐたものである。併し今になつて考へると、其頃目に触れたくだらない本が、今尚ほかすかに幾らかの印象を残してゐるのみでなく、私の過去数十年間の仕事に、自分では心附かなかつたけれども、始終何等かの影響を及ぼしてゐたやうに思はれるから、おそろしい。
>
> 其頃目に触れた本で、今尚ほおぼえてゐるのは、第一に『実語経』、『孝経』、『大学』、『論語』無論、これらは厭々素読を教はつたばかりだが、何百度と読まされたので、文句には今なほ微かに其頃の記憶が残り、『実語経』だけは粗ぼ意味も解してゐたと思ふ。それから『百人一首』。これは古風な大型本で、画は西川派風であつたと記憶する。（中略）次ぎは英泉、北斎、其他の漫画本。要するに、読むより見るはうが好き、目で見たことはよく覚えるが、単に耳から注込まれた事は容易に呑込まぬ鈍根、若しくは気の散る性質であつた。[29)]

というように、『百人一首』の人物の目か鼻か口元か烏帽子の尖か衣装の端かを、ほんの一部を見ただけで、その人物名が当てられるほど、目で見たことはよく覚えられたらしい。それで図表を作り、頭の整理をつけながら、小中学校の生徒への教授法を考えたり、教科書作成にあたったのである。そして、

> 種は十歳以前に蒔かれてしまつたのである。運命が定つてしまつたのである。三つ子の魂百までだと思ふとあさましい。つくづく幼時の修養のゆるがせにしがたいことを今更のやうに悟る。（中略）少年諸君よ、四十余年の後に私と同じやうな事を言はぬやうに、とっくりと考へて勉強なさい。[30)]

と、少年世界の読者に、少年時代の読書の大切さを説いて、結びとしている。だから逍遙が教科書を作りながら、ふっと小学校の校長になろうかと思ったというのも首肯できるのである。

おわりに

1859年、横浜開港の年に生まれた坪内逍遙は、学齢期を慶応２年から明治の初めにかけて迎えた。それまで日本の伝統教育の形成をになっていた藩校も、動乱とともに廃され、初等教育を家庭内での教育や、不備を極めた旧寺子屋に依存せざるを得なかった。本稿では、時代の激変によりやむを得なかったとはいえ、家庭での教育、ついで旧態依然とした寺子屋で、読み書き式の初等教育を受けた逍遙が、それをどう受け止めたか、批判したか、などを探ってきた。身をもって体験した初等教育の重要性がどのような形で継承されているか、今後は、長じて預かり学生の面倒をみた私塾や、英語を教えながら、作

29）坪内逍遙「十歳以前に読んだ本」（『逍遙選集』第12巻、1977年10月22日発行、44頁）
30）同、46頁

成した教科書、早稲田中学校在任中に発行した数々の教科書などを検討し、逍遙の新倫理観に立脚した修身処世訓を探るつもりである。